



ふひょう いちどう 浮萍 一道 開く

● NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹 田 保

札幌でも、桜のつぼみがほころび始めました。長い冬を室内で過ごす私たちにとって、春は特別な季節です。窓から差し込む陽ざしが暖くなり、道の雪が溶けて外出が楽しみになるそれだけで、気持ちが明るくなります。

しかし、今年はその春を心から喜べない現実があります。報酬改定により報酬が減額され、訪問介護事業所の運営が厳しくなっているとの報道が目につくようになり、特に北海道は広域で人口が少なく、冬期間には吹雪や凍結した路面のため、訪問先への移動時間が通常の数倍かかることも珍しくありませんが、こうした移動時間やコストが報酬には反映されず、事業所の収支は悪化する一方で、その結果、廃業やサービス縮小が相次ぎ、地域の訪問介護の担い手不足が深刻になっています。

私自身、支援者による支援がなければ外出どころか日常生活も成り立ちません。訪問サービスが縮小されることは、障がい者にとって大きな不安です。桜が咲き始めても、人材不足の影響で気軽に外出できない方が増えていることを、日々のピアサポートの活動を通じて痛感しています。

そんな中、私が今、ひそかに期待していることが二つあります。一つは今年開催される大阪万博、もう一つは外国人技能実習生による訪問分野への参入拡大です。

大阪万博は、最新の福祉テクノロジーが世界から集結する絶好の機会です。目の動きや考えただけで操作可能な電動車いすや、AIによるコミュニケーション支援、そして人型ロボットなど、これまで空想でしかなかった技術が現実のものとして登場するかもしれません。人材不足を補うための技術革新が、私たちの想像を超える速さで進んでいるのです。こうした革新的な福祉技術に実際に触れる機会を持てば、私た

ちが抱えている課題の解決策が見えてくるかもしれません。

ただし、障がい者が実際に万博へ参加すると、交通手段や宿泊施設、介助者の確保など、多くのハードルが存在します。特に電車や飛行機での移動は、車いす利用や介助者の同行など、大きな負担と準備が必要です。それでも、最新技術を目の当たりにし、未来への希望を掴むために、一度は行ってみたいと思っています。

外国人技能実習生の訪問介護分野への拡大も、人手不足解消への大きな可能性を秘めています。高齢化や人口減少が進み、特に北海道のような地域では、担い手不足が常態化しています。外国人の方々が介助者として地域に根付くことで、訪問サービスの安定化や質の向上につながると期待しています。しかし、具体的な研修や受け入れの枠組み、言葉や文化の違いを克服するための仕組みづくりなど、課題も多く、今後、自治体などがどのような体制を整えるか、関係者の知恵が求められます。

万博開催や外国人実習生の受け入れ拡大のニュースを聞くと、私は春の訪れを待ち望む気持ちに似た期待感を抱きます。まだ具体的な成果が見えない状況ですが、少しでも明るい兆しが見えれば、それを励みに課題を乗り越えていける気がします。

今、私たち当事者ができることは、自分が日々感じている困りごとを積極的に周囲に伝えることだと思います。現場の実情や当事者の声をきちんと伝えることで、行政や事業所、政策を考える方々にも理解が深まります。そうした積み重ねが報酬体系の見直しや新技術の導入促進につながり、地域の訪問介護が持続可能になると信じています。

春を心から喜べる日を迎えるために、私たちが声を上げ続けることが大切です。一人の声は小さくても、障がいを持つ人々やその家族、支援者が力を合わせれば、社会を動かす大きな力になります。桜の花が満開になる頃には、私たちを取り巻く環境が改善し、心から春を楽しむ日が近づくことを願っています。私も自分の思いを発信し、皆さんと共有し続けたいと思っています。